

龍南會雜誌第貳拾壹號附録

豐筑修學旅行日誌

我校例秋期を以て、長途行軍を行ふ。廿三年、

始めて福岡に遊び、二十四年、西肥を廻ぐり、

昨秋、鹿兒嶋に至り、鎮西九國概ね踏破し盡し

て、餘す所僅かよ兩豊の地あり。此地亦いかん

ぞ永く、我壯士の芒鞋を免れんや。乃ち今秋十

一月六日を以て途に上り、豪遊十二日、或は野

外演習を荆棘蕪穢の地より行ひ、以て武膽を練

り、或は宇佐の神社に古忠臣を懷ふて、義魂を

躍らし、或は耶馬溪に遊びて、天下の勝を究

め、大に智勇を兼養ひ得て還る。其間目の觸る

る所、耳の聞く所、記して傳ふべきもの實に少

々ならず。生等不肖誤つて校命を受けて、記録

の任に當り、特に隊伍を離れて、視察を精しく

するの榮を得たり。而して淺學不敏遂に奈何

ともするなく、稿成り一讀通過すれば、文字蕪

雜、記事疎漏、誠に慚愧に絶へず。然れども例

により尙ほ探て本誌の末尾に附す。會員諸士、

其不敏を憫れみ、深く其罪を責むるなくんば

幸甚あり。豈敢て他を望まんや。

癸巳十二月

水月 哲英

村川 堅固 共識

六日

天空一碧洗ふが如く、金風颯々自ら壯士の行を促

すに似たり。我旅行軍初日例に雨る、今歲初めて快

晴を得、意氣踴躍、壯心勃如、抑ゆべうらず。午前

七時朝餉を終るや秋月教授、在寮生一同を雨天体

操場に集め、諄々説いて曰く。

凡る人生順逆の二境あり。順は人之に就らんこ

とを欲之、逆は人之を去らんことを願ふ。然れど

も身を益することは、却て逆境に多くして順境

に少し。是予が七十年來の經驗に徴えて、確知す

る所あり。思ふに諸子が今回の旅行や、寧ろ逆境

多からん。宜しく能く忍耐して、大に益を求むべし。余は諸子の健康にして歸校するを待たんのみ。

十時全員練兵場に整列せ、沼田大尉指揮して隊伍を部署す。先づ全員を分つて二中隊とせし、各中隊分つて三小隊とせし、各小隊亦分つて四分隊とせす。第一中隊は安東教師これを率ひ、第二中隊は三池教師之を率ゆ。其他各小分隊皆長あり。而えて沼田大尉全隊を監す。

部署已に定まる。中川學校長乃ち進み出で、告げて曰く

夫れ修學旅行は一種の課業あり。其地理歴史博物其他百般の學術上、大益あるは固より論を俟たず。然れども此行を以て行軍と通稱する所以は一、規律を守ること一、艱難辛苦に堪ゆること一、氣質鍛鍊を實習することの三點を、嚴守せしむるにあり。されば諸子は行中終始、沼田監督の命を奉し、敢て或は背くこと勿れ。嚴正の舉動を

失はず、以て我校の名聲を發揚せよ。飲酒する勿れ。買喰する勿れ。以て大に費用を節せよ。

告示終る。乃ち晝餐を喫し、十一時嚴令一發、行を啓く。喇叭嚙唳校門を出づ。豪氣堂々、歩武正々。乃ち光白日に映して光閃々、劔戟相摩して響鏘々。恰かも深く胡地に入り、遠く窮髮の境を蹈んで。珠動を万里絕域に立てんと期するもの如し。教職員生徒凡て二百五十有餘名。

校門を出づれば四望空濶、東天遙かに蘇岳の噴煙を望み、近く託摩の平原を見る。路を大津街道に取りて進む。老杉道を夾んで日光透らず。軟風面を吹て秋氣夾ざるを覺ゆ。進むこと數丁、一橋長く白川に架するを小磧橋と云ふ。望み見て過ぐ。上立田に至りて小憩す。路傍巨杉數十株、蒼鬱環立す。其間宮本武藏の墓あり。武藏双刀の術に鬼神を泣かせしめ、六十餘州向ふ所敵手なく、武名を一世轟かせしも、今や斷碑一基、僅うに古を語るに過ぎず。眞に『虎視鷹揚何處枉。道邊孤塚可憐生』。道岐れて三

とある。右すれば則ち直ちに阿蘇郡立野へ出で、左すれば則ち合志郡大津に至る、乃ち左して進む。小窪茶店を過ぐ。在昔熊本侯の江都に參覲するや。途必らず此に憩ふ。店業繁盛、今や瀛宙一たび西北の野に響きて、行人頰に減じ、僅かに疇昔の痕を留むるのみ。更に進むこと二里。午下三時大津町に着す、乃ち隊伍を解き、各自所定の逆旅に投す。

大津は合志郡中の大市にして、溪流に沿ふて町を成し、園圃の中、淙々の聲を絶たず。阿蘇熊本間の要路に當り、阿蘇地方の産物こゝに集りて然本に入るが故に、車馬絡繹、市況繁盛あり。高等小學、郵便電信局並に警察署あり。

明日假設的演習を、阿蘇下野原附近の地に行はんとし、此夜監督より左の命令あり。

一般方略

行橋附近ニ集合シタル北軍ハ熊本ニ向テ前進ス
南軍ハコレヲ偵知シ途ニ迎撃セントス

南軍特別方略

諸兵連合ノ支隊ヲ大分街道ニ派遣シ本隊ノ右側ヲ掩護シ敵ノ側背ヲ脅威スルヲ謀ルベシ

支隊編成

司令 陸軍歩兵少佐某

歩兵第十三聯隊第一第二大隊(實員二中隊)

騎兵第六大隊第一中隊ノ一小隊(想像)

野戰山砲兵第一中隊(想像)

北軍特別方略

諸兵連合ノ支隊ハ大分竹田ヲ經テ熊本ニ向ツテ前進シ本軍ノ左側ヲ掩護シ其行進ヲ容易ナラシムルニアリ

支隊編成

司令 陸軍歩兵少佐某

歩兵第廿四聯隊第一第二大隊(實員一小隊)

騎兵第六大隊第二中隊ノ一小隊(想像)

野戰山砲兵第二中隊(想像)

七日

夢覺ゆ窓を排すれば、天色清朗昨日に異ならず。鹽

嗽喫飯、前七時半を以て宮地に向つて發す。而して此日演習の北軍たる第一中隊第一小隊は、本軍に先づ一時、六時半を以て發す。町を出づれば、直に蘇山を眼前に見る。(中央噴煙昇騰するものを中岳と云ひ、之を周りて峙つ所の四岳、曰く杵嶋岳、曰く高岳、曰く根子岳、曰く鳥帽子岳、合して阿蘇五岳と稱す。而して倭山二重峠等、更に一大環をなして、これを圍繞す。大環一畝する所、白黒二川の水を合せて、之を排出す。立野村正に此畝刻に當れり)東行十餘町、阿蘇新道に會す。これより路白川の流に沿ふて上る。瀬田の橋を眼下に瞰て進めば、白川帶の如く脚下に布き、水亂石礫腕の間を潛り、驚湍奔激滾々聲あり。此邊目に觸るる所の岩石、安山あらざれば則ち玄武、玄武あらざれば則ち熔岩、坐るに行人をして火山作用の猛烈かりし右を想はしむ。九時立野に小憩す。立野を過ぎれば、直ちに阿蘇れ火口丘に入る。滿目廣衍、嶺山躍々、絶えて樹木を見ず『仰げば高し赤膚の山』是あり。蓋し阿

蘇一帯の地、土壤盡とく火山岩の霽爛せるもの、疎鬆澆痛、樹木の宿根を許さざるあり。十時廿分進むこと既に十余町、路傍俄かに雷激の聲を聞く。數鹿流瀑也。乃ち隊を解き田塌を下り、崖頭に至り立て之を觀る。首を延ばして下瞰すれば、懸崖削立、直折横裂、皴々然として斧鑿の痕の如し。巖角相逼る處、瀑水飛下す。高さ四十尋、万斤の綿を轉するが如く、大聲駘檣、山岳皆震ひ、漬沫逆上、珠飛び玉躍る。其下則ち碧潭、廣さ數百武、深さ知るべからず。俗以爲らく、元祿以來蛟龍其底に潛むと。目眩み心悸き、毛髮竦然、久しく留まる可からず。傍一小瀑あり。銅提瀑といふ。水少しと雖、丹楓の間より下り、雅致却て數鹿流の右に在り。(口碑に云、神代の時、阿蘇山に湛ふる水を決せんさし、其堤を觀察し、一處を指して曰く、此處二重障破る可からず。此處即ち今の二重峠なり。又一處を指して此處破るべしとて、一蹶し玉ひたれば、土塊飛んで堤破れ、水落ち流れたり。數鹿流即ち其處にして、今の合志郡津久禮村は、つちくれ村の約にして、其土塊の落ちたる所なり。而して阿蘇山の鹿此時數多流れたるより、數鹿流と呼ぶ。荒唐の説なれども、嘗て此火口丘に、水を湛へて地學上所謂、火口湖を作らしむは、明なれば、此火口湖は口碑時代迄存したるものか。而して其決を以て、大神の一蹶に歸するは、神を好みし古代人民の迷信なるべし。)

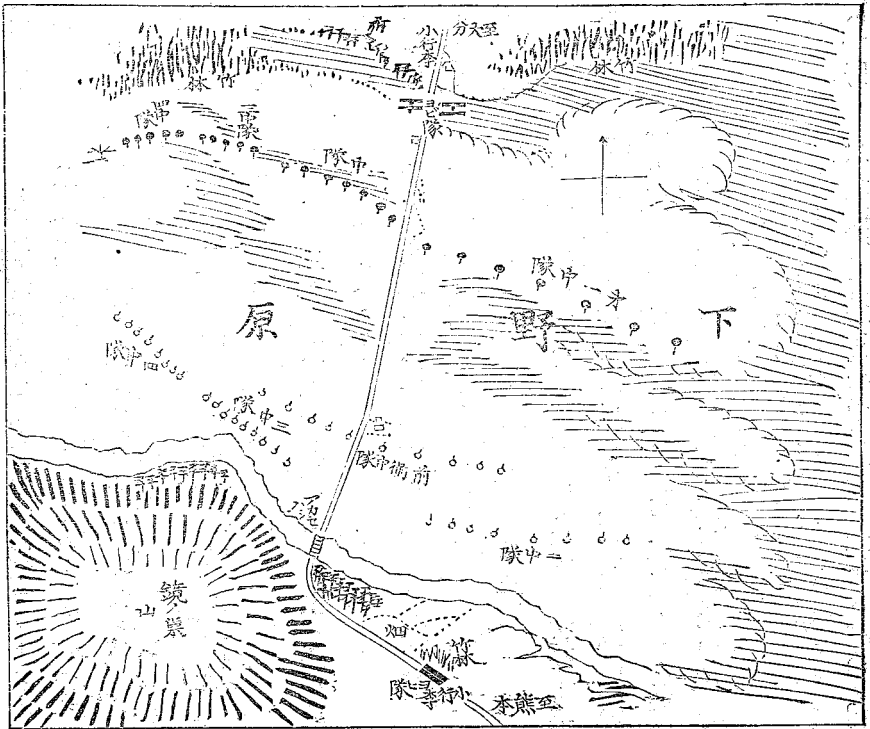
晝餉を終り、十一時二十分發す。行人の報に據るに、北軍既に數町の内にあり。即ち三池支隊長は左の命令を全軍に傳ふ。

南軍右側支隊命令

(十一月七日午前十一時
三十分立野村に於て)

- 一、敵は下野原高原ヲ占領セリ予ハ之ヲ攻撃セントス
- 二、第二中隊ハ本道右側ノ高地ヨリ敵ノ左側ヲ攻撃スベシ
- 三、第三第四中隊ハ本道左側ヨリ敵ノ右側ヲ攻撃スベシ
- 四、第二大隊ハ下野村宇赤瀬ノ二軒小屋ノ邊ニ在テ豫備隊タルベシ
- 五、小行李ハ豫備隊ノ位置ニアルヘシ(右ニ條想像)
- 六、予ハ赤瀬橋ノ後方ニアリ

右側支隊長某



乃ち斥候先つ發し、尖兵之に次ぎ、前衛本隊之に次ぎ、本隊は五百米突を隔て、其後に尾して進む。行く數丁、遙かに敵影を認む。小丘に據り、散開して我軍を待つものゝ如し。既に去て銃聲忽然、赤瀬橋邊に起る。蓋し我斥候、敵の斥候と衝突きて、先づ一發を試みたるもの。乃ち南軍前衛本隊を進めて、散開きて北軍の本隊に當らしむ。北軍寡兵を以て善く防ぐ。南軍乃ち本隊を進て、前衛の伍間に増加し、射撃極めて急、銃聲益加はり、山鳴り谷應じ、殆んど實戰の如し。既にして北軍支ふる能はず。退て凹地を保す。而して此時北軍火藥既に竭きて、復奈何ともするなし。

零時五分、喇叭一聲終局を報す。兩軍各兵を収めて、宮地街道に整列す。而して沼田統監は各中小隊長を集めて、講評をなし、各軍支隊長より情報を與ふ、此日北軍の支隊命令は左の如き

北軍左側支隊命令

(十一月七日午前第
十時赤水村ニ於テ)

一、敵ハ國道ヲ大分ニ向テ前進ス本支隊ハ下野

原高地ヲ占領シテ之レヲ防禦セントス

二、第一中隊ハ本道ヨリ左側面ヲ守備スベシ

三、第二中隊ハ本道及ヒ本道ノ右側ヲ守備スベシ

四、第三第四中隊ハ本道ノ右方ニアル高丘ヲ守

備スベシ

五、第二大隊ハ下野原後方ノ窪地ニ在テ豫備隊

タルベシ(想像)

六、小行李ハ下野原後方ノ森林中ニアルベシ(想像)

七、予ハ本道ニアリ

左側支隊長某

終て零時半、下野を發す。進んで永水村字長草に至る。途五岳の麓に沿ふて廻る。突兀たる童山、噴煙天を衝き壯觀を極む。是に於て、隊を解き、青棘の間に坐せ之め、矢津助教授は。立て地質上の演説を爲せり

今諸君と共に此噴火口中に立て、最も趣味ある野外講習を爲すは、予の甚だ欣喜する所あり。諸

子當よ記すべし、今回の修學旅行地は、蓋くこれ阿蘇噴火帯の内にあることを、抑も此噴火脈は、西金峰山に起り、阿蘇、久住、鶴見、由布の諸火山を噴起せ、東豊後の國東岬端シヅカキに至つて盡く。而して我輩は正さに此間を貫過するものあり。故よ火山に關する過去の遺跡は、十分之を目撃するを得ん。諸君無心にて、此好機を過すことかかれ。今日我々の經過する此原野は、即ち阿蘇の舊噴火孔内にして、諸君が目撃する四圍の環狀をかせる諸連山は、即ち此大噴火口の孔壁よして、地學上所謂外輪山(Somma)是あり。而して此大孔は東西の徑七里、南北は四里に亘り、往古地火力の猛烈なるに方つては、此全部より盛よ溶岩、其他の岩石を噴出し居たるあり。此邊見る所の磊落たる諸岩石は、即ち當時の遺物にして、最も重くして緻密なるものは、概ね熔岩の凝固せるもの。稍輕くして、全部同質なるものは玄武岩。尙は輕くて異種の諸岩、斑點をなして合成する

ものは、これを安山岩といふあり。諸君。此廣漠ある原野の全面より、此等の諸物を噴出し居たりき、當時の景況は、實に想像に余りあるに長ずや。其後地火力の滅殺と共に、大孔全面の噴出は止めて其中心より處々に小噴起をかきたるもの、即ち諸君が現に、仰ぎ見る所の五岳にして、これを寄生火山(Palastic volcano)と稱す。又我輩が昨夜宿泊せし大津町は、此外輪山の外斜面に立つ所のものあり。又今日諸君が休憩せし立野驛は、嘗て此舊噴火口に潜湛せし、大水の潰決せる處、之を地學上山口瀨(Barranco)と稱す。今日に於て、五岳の南北ある阿蘇、南郷の兩火口丘(Arto)の溪水は、相集て白川黒川の二水となり、此山口瀨に於て相會し、白川とありて合志郡に入り、飽田郡に入りて、遂に我高等中學の前面を經過するなり。

ろくの如く地學上より觀し來るときは、今回の修學旅行地は、盡とく殺風景ある、噴出の遺跡に

過ぎずと雖も、胸間一片は詩思を貯へて之を觀
ば、枯薄秋風に戰いて人を招く處、綠葉黃ばん
で、丹楓花よりも紅なる處。興味涌出、愉快言ふ
べからざるものあらん。特に豐の耶馬溪の如き
は、天下の絶景、頼子成嘗てこゝに遊び、圖卷の

記を作つて曰はずや。予が詩文元と策拙、其髣髴
を狀するに足らず。況んや画をや。後に能者董巨
倪黃の流の如きものありて、其境を竭して之を
補成せば、此山水に負らざるに庶幾うらんと。望
を吾人後進に属する所多し。諸君、戎衣身に着
け、佩劍腰に在るも、如何ぞ空しく此山川に對す
べけんや。詩思的思想の養成、亦當さに諸子が勉
むべき所あらん。

實地に臨んで此講演を聴く。環拱起伏せる諸嶽、噴
煙奔昇する火山、盡とく活標本とありて、講話に資
す。這般數十分の聽講は、實に教室裡幾多の苦學に
勝るや論なし。嗚呼劍を揮ひ、銃を轟きたる壯士。
忽ち翻つて思を地文に潜め、以て造化の理を究む、

兵式修學旅行の名。眞に虚しうらさ。

將さに坊中に入らんとす。坊中尋常小學校教員、生
徒を率ひて出で迎ふに會ふ。一行其前を過ぐるや。
生徒數十、一齊に軍歌を誦して、我れに尾して進
む。諸ふ所果きて何事ぞ。

ゆふ勇ましの學生や 山河の險をふとさく

智識をひろめ身を鍛ひ 銃と名譽を擔ひつゝ

歸る學びの窓の菊 君待ち顔もいさまし

進みて行かせ我兄たち 喇叭の聲もいさまし

此日歩む所既に七里、特に下野に奮闘して氣勢稍
衰ふ。且雨らざる既に數日、歩々塵埃煙の如く颯
り、面目盡く黧とある。軍歌一たび可憐少年の口よ
り起て、清音琅々、宛然天使の靈音の如く銳氣復
活、銃自ら軽く、足自ら進む。己にして阿蘇中部高
等小學、亦遠く宮地より來り迎ふに會ふ。同しく軍
歌を唱して我に殿す。而して其誦する所、我れ今回
の軍歌あり。聞く此少年等、前日を以て此を我れの
先發者に得、夜を徹して暗記せるものありと。

坊中を過ぐ。此地其昔阿蘇の本地、三十六坊躰を並べ、最榮の聖跡、顯密の道場として、諸人渴仰の靈域ありしも、星移り物換り、今其跡を吊へば、落葉深き處、一字の古刹寂寞を守り、破扉僅かに『鎮國山』の寺榜を存するのみ。

竹原を過ぐ。尋常小學生の出で迎ふに會ふ。進んで岳見橋を過ぐ。忽ち見る、中天物あり、爆發して彩旗を散らすを。これ宮地町の有志者が、相謀て我一行の爲めに、烟火を揚げたるもの。續て十餘を揚ぐ。衆勇氣頓に増し、堂々として宮地に入る時に午下四時半。

宮地は阿蘇那の大市に迄て、商家隣次、阿蘇神社を以て著はる。市外に阿蘇警察署、同郡役所、裁判所等あり。

結束の儘直ち、阿蘇神社に詣づ。當社緣起に曰く『肥後國一宮阿蘇大明神者健磐龍命タケイハタツノミコ阿蘇都媛速瓶命アソトノミコ是祭テ阿蘇三社大明神ト號ス夫健磐龍命、神武天皇第二之皇子神八井耳命ノ第五之御子ニシテ自大和

國神武七十六年二月朔日ニ阿蘇國下在鎮座草部

吉見御娘阿蘇都媛娶トツテ速瓶玉命ヲ産後壽一百七

歲ニシテ神武九拾三年八月十五日ニ崩給瑞籬ノ御世

火國造同祖神八井耳命之速瓶玉命定賜國造故ニ速

瓶玉命ヲ國造ト云壽四百八十歲崩此ノ神ヲ祭號北宮

ト也遂後國立明神比咩御子明神彦御子明神若咩

明神新彦明神新比咩明神若彦明神彌彦明神金凝明

神是ヲ加テ號十二社宮トモ奥殿ニハ天照大神神武天

皇神八井耳命天神地祇祭テ諸神社ト號ス此後人皇

十二代景行天皇將向京以巡狩筑紫國之時ニ天皇

十八年六月十六日到阿蘇國也其國郊原曠遠不見人

居天皇曰是國有人乎時有二神曰蘇都彦阿蘇都媛忽

化レ人遊詣之曰吾レ在二人何無レ人耶故號其國曰

阿蘇此後乘鶴鹿鳥東飛去其行處留杉村不見其所有

二神社是今神宮所也則此處二神ノ御陵在也云々

二千年來の古社にして、社格官幣中社に列し、樓門

宏壯巍々天を摩す。門を過ぎて入り、正殿に面して

整列し、捧銃の式をなし、喇叭手君が代の曲を吹奏

隊以外の者盡く脱帽肅拜す。殿堂莊嚴、古色を帯び、神威凜乎、人をして肅敬の念を起さしむ。拜し終るや、一行拜殿を繞りて坐し、社内の藏物牡丹作の寶刀を覽る。菊池家の害附に係り、長さ一尺半許。銀室飾るに黄金を以てし、牡丹花數輪を彫出す。金光熾煌、眼を奪ひ、彫刻精巧及ぶべからず。蓋し南北朝の際、造兵の技進歩想ふ可きあり。社を辭し直ちに一同阿蘇男爵の邸に至り、藏物を覽る。就中寶劍瑩丸、最も稀世の珍たり。長さ三尺三寸、銘曰永仁五年三月一日と。實に六百年以前の作、一たび室を脱すれば、異光耿々、肝膽寒く、肌粟を生ず。眞に犀象砍るべく、蛟龍截つべきもの。其傳説に至つては、軍歌に詳あり。復贅せず。其他下野の獵の巻繪物大幅數軸あり、建久年間、源右府大に富士野に佃するや、一に法を下野の狩に採りしと云ふ。以て其犬擧たりしを知るべし。下野は則ち今の赤瀬橋以東一帯の地にして、此日我一同が演習して砲煙を漲らせし處是なり。阿蘇公痛く之を喜びしと

云。其他蜀江の錦あぞ。聞く明皇帝之を我征西將軍懷良親王に獻し、親王後之を阿蘇家よ賜ひしと。又南北朝の際賜はりし、討賊の綸旨を藏するものと最も多き。用紙皆黝色、所謂薄墨の御綸旨といふ者是也。想ふに元弘建武の際、天日光薄く、魍魎跋扈し、六十餘州概ね鬼魅。而して西陲僅かに我阿蘇菊地の二氏あり。誓つて國賊を亡ぼして、天子に報ひんと欲す。知るべし、皇室亦深く此二氏に托し、憑りて以て倒瀾を回へさんとし給ひしとを。拜讀坐ろに當時を追想すれば、感慨滿腔。暗淚征衣に墮つ。

御綸旨寫

足利尊氏同直義已下輩有反逆之企之間所被誅討也阿蘇前大宮司
惟時令發向鎌倉可致軍忠者

天氣如斯悉之

(建武二年)十一月二十五日

左中將 花押

尊氏直義已下兇徒攻落鎮西云々相催一族並薩摩國地頭已下軍勢
可被追討者

天氣如斯悉之以狀

三月二十五日

右少辨 花押

阿蘇前大宮司許

阿蘇家より一行は茶菓を頒ち與へらる。我有志者數十人、庭上より立ち軍歌阿蘇の一節を誦して謝し去り、各分宿す。

此日安田阿蘇郡長は、一行を岳見橋に迎へ、夜に入りて職員を其家に招き、饗宴を張て旅勞を慰す。而して別に柿數百顆を生徒に贈る。

始め工科二年生、寫眞器を携へ、本隊に先つて發し、阿蘇噴火口を登覽せしが、此日來りて一行に會す。

八日

曇、前六時半宮地を發す。阿蘇中部高等小學校職員、我一行を送て坂梨に至る。

坂梨は阿蘇郡中の一都會にして、家屋櫛比、數町に連り、般盛宮地に亞ぐ。蓋し此地舊坂の脚といふ。峻坂の直下に當るを以てあり。終に轉して坂ナシとあり、今や梨字を以て之に充つ。

尋常小學生の出で迎ふに會ふ。過ぎて小憩す。生徒蟻田氏茶菓を以て一行を勞す。町を出で、行く數

町、瀧室峠の麓に出づ。即ち阿蘇大孔を圍む障壁の一部にして、急坂前に當る、瀧室坂といふ。即ち外輪山の内壁を通ずるものにして、傾斜甚だ急。仰ぎ見れば丹楓妍艶、薛羅密茂の間、坂路羊腸たり。乃ち勇を鼓して上る。上ること數百步、一老銀杏樹下小祠を祀る、溪水傍より滴下し、幽邃大に心目を慰す。更らに進て路曲折する所に至り、來路を回顧すれば、煙霞模糊の間、阿蘇高原を見る。黃雲千里、山村水郭其間に隱見し、好景名狀すべからず。半腹に至る比ひ、喇叭の聲起る。音調勇壯、疲を覺へずして直ちに山巔に達す。

坂上に小憩し乃ち發す。これより途平坦僅かに下る。甚だ行歩に便なり。おれ所謂外輪山の外壁あり。小池野を過ぎ、雲際遙らに久住山の聳ゆるを見る。行くこと一里、界の谷に至る。即ち豊肥の境にして、これを過ぐれば直ちに豊後直入郡に入る。熊本縣廳を去る十五里二十二町十間一尺。已にして密雲四塞、天色濛々、時に雷鳴を聞く。行くこと一

里、菅生に達す。大雨遂に沛然として至る。即ち茶塵に入り、書餉を喫し、外套を着け、雨を衝て發す。

菅生近傍の地は、上古景行帝の土蜘蛛賊を滅ぼし給ひたる處に於て、古跡甚多し予等一々之を採らんと期せしも、大雨に會ひ之を悉くす能はず。今豐後國志の記する所に據り、傍ら自ら視る所を參じへて、其一二を録せん。

○彌野子ヤノ 菅生を出で、行く數丁、路の左右童山起伏する所を彌野子ヤノといふ。國志に曰く「風土記曰 天皇(景行)欲伐土蜘蛛之

賊。在茲野。勅歷勞兵衆。因謂彌野也。按日本紀曰。到速見邑。有女人。曰悉賊之所在。於直入縣彌野。有三蜘蛛。又徑度彌野山。似固有此名。風土記曰。歷勞之義。恐誤。」

○彌野八幡祠 野の東に在り。豐後國志以て景行天皇を祀る。さなす恐らくば非也。口碑に據るに、天皇の賊を伐つや、賊勢猖獗、容易に亡ぼし難し。天皇乃ち神に禱るに、賊を滅すを以てす。

賊乃ち出で來り、天皇に面して立つ。四肢強直、動くべからず。天皇乃ち弓を引て、之を斃す。而して天皇禱る所の神、今之を彌野に祀る。明治の初年、社格を進めて、官幣社とせしむ。祭神天皇に非ざるの故を以て、遂に止みし。祠傍一頃田あり。血田と呼ぶ。日本紀に曰く「採海石榴樹。作推爲兵。因簡猛

卒。悉殺其黨。血流至踝。故時人其作推之處。曰海石榴市。亦血流之處。曰血田。是也。

○古墳 菅生より半里許、戸上村にあり。巨杉環立するのみにて他の奇なし。傳云、景行帝滅す所の、土蜘蛛の墳也。

○鬼麿窟 菅生より左折し、小徑を行く。こ半里、池部村字朝鍋に至る。密樹の間を下り、幽谷の底に入る數丁、一大窟あり。懸崖絶壁、北に面して開く。巾五十間許、高さ凡十間、深さ五間、天さ横百人を容るべし。彌野の三賊、打鐵、八田、及國麿侶、景行帝に追突せられて、此窟中に潜匿したりといふ。窟の四圍、竹樹簇立、人跡至らず、容易に近づき難し。

行くこと一里、雨益々加はり、車軸を流すが如し。劍銃背囊盡とく濕ひ、寒氣肌を徹す。而して道路泥濘、布襪芒鞋、盡とく淤泥に没し、不快言ふ可からず。已にして雨少しく止む。試みに頭巾を排して四顧すれば、疊障屏列、嵐を窺め、翠を罩め、丹楓雨に融けて、白雲を染め、三百征人畫裡を行く。

行くこと一里、玉來を經(玉來舊猫原と云ふ。正安二年始めて街を置く。文錄の初め、中川修理太夫秀成封を移すの後。玉來の民戸五十余區を以て、竹田

に移す。寛文四年火ほりて遺戸灰とありまが、更らに興えて一條の街を爲せり。更に進む數丁、一墜道に入る。此を過ぐれば、直ちよ碧瓦皓壁の一市を見る。則ち竹田町なり。着する時方さに午後三時。

竹田は連山四圍の間にあり。他と通するに必らず墜道に由らざる可からず。(直接に町に通する墜道なるもの七十五間。其他町より少しく隔たるものを加ふれば二十に下らず。)世故に蓮根町の稱あり。町の西十余町、稻葉川に臨て岡城趾あり。

文治元年、緒方惟榮其要害の地あるを見て、始めて壘をこゝに設く。後大友能直曾孫貞朝、建武中舊堡を修めて、始めて岡城と稱し、世々こゝに居る。天正年間、豐薩の戰に、志賀親次之に據り、攻守皆功あり。大友義統國除らるゝの日(雜錄「大友氏ノ興衰」を看よ)親次城を棄て去る。文錄二年、中川修理太夫秀成(中川教授の祖)播州三木より封をこゝに移せ、後世之を襲ぎ、以て明治維新の時に至る。維新の始め、盡とく城を毀ち、今は一も舊觀を留めず。

思ふ竹田の地、山間に僻在し、全く交通の便を欠ぐ。決して商業の中心とえて、自ら都を成すべき所にあらず。封建的人爲的の都會あること明かり。然れども今や五千余の人口を有し、商業殷盛、少しも衰微の兆なし。製糸會社の設あり。糸質佳良、盛に海外に輸出すといふ。此日町の有志家、柿實、煎餅、鶏羔を贈りて職員生徒を勞す。

九日

豐音寺の曉鐘頻りに起床を促がす。乃ち起て天色を窺へば、一碧拭ふが如く、東方僅かみ紅を孕み、復疇昔の痕を留めず。前六時半、食を終り衆皆快哉呼んで發す。稻葉川を渡り、流に沼ふて行く數丁、兩岸奇巖屏列、丹楓其間を綴り、大に人目を慰む。流に臨んで直入高等小學あり。山水幽雅、市塵至らず。自ら教育の好地をらむ。其對岸路左一古刹を見る。舊城主中川氏の塋域にして、碧雲寺といふ。慶長年間、中川秀成これを經營し、未だ成らざるに卒

す。嗣子久盛其地を以て香華院とかし、雲室禪師を延いて住よしむ。文錄年中朝鮮の役に獲る所の寺勝、題して碧雲寺といふ。以て法諡とあす也。今に存す。其他本尊觀世音坐像、門扉等朝鮮に獲る所のもの、多く存す。これより數丁、墜道あり。出て行く一里、岡本上井田の諸村を經、朝倉に至り、路岐れて二となる。右は臼杵に通するもの。左は野津原大分に達するもの。岐るゝ處一橋架す、欄干に倚て下瞰すれば、巨石嵒岬、溪水其間を渴下し、湛へて潭を成す。深碧凝靛の如く、老松一幹、枝を垂れて之に臨む。三伏の候、必らず瀕死の行旅を蘇するに足らん。朝倉を過ぎれば道漸く上る。これ蓋し神角山彙の一部を開鑿して、新たに通するもの。舊道よ比するに、頗る捷といふ。行くこと二里、山勢遽らに逼りて、路幽谷の間に入る。これを眞喜谷といふ。溪に循ふて上ること數百步、山愈深く、谷愈窈く、密樹日を蔽ひ、嵐氣人を襲ひ、別天氣に入るの思あり。首を翹げて林杪の間を望めば、左右奇崑特

立、紅楓これに生じ、爛然蒼翠と參り、丹碧絢爛、錦を懸くるが如し。而えて澗水潺湲、奇石の間を洄湫し、墜錦を浮べて去る。既にして一橋あり。其傍ら澗に臨んで、茅茨數椽を構ふ。清景宛然一幅の畫圖の如し。若し頼子成をして、一たび此を過ぎしめば、恐らくば耶馬溪獨り海内第一の名を恣にせじ。橋を過ぐれば坂あり。坂窮る所山開く。これを大分街道の最高點とあす。茶廛十數、軒を列ねて行客を待つ。温見驛是也。乃ち休憩して晝餐を喫す。時に前十一時。これより路漸く下る。行く半里許、山勢再び逼て荒木谷を爲す。楓樹の美眞喜溪よ及ばずと雖も、怪崑嵯峨天に挿む所、水聲喧騰、相馳逐して下る所、奇却て眞喜溪の右に出づ。蓋し此二景遽かに優劣し易ららず。溪に沼ふて下る半里、山舒び水緩く、望大に開く。これより後、經る所盡く水害の餘を承け、道路崩壞、橋梁盡とく墜ち、角石足を嚙み、歩甚だ窘む。而して田畑荒蕪、不毛に歸きたる所あり。

家屋傾倒、人おきものあり。稻を乾らす老翁あり、徒らに席の廣さを嘆じ。機を織るの婦あり、農事の閑あるを唧つ。慘又慘、一として行旅傷心の具あらざるなし。過ぎ行く二里、巨巖を裂開して路を成す。これを過ぐれば田畑の間一市を認む。これを野津原となす。着する時午後四時。此日歩む所八里、道路角石足を噛み、痘に艱みて僅うに達するを得るものあり。

十日

稻曇る。六時半朝食を終り、將さに發せんとす。第一中隊第一小隊、全第二小隊と此日の先登を争ひ、紛々數刻、遂に沼田統監の一言を煩すに至る。これ實に今回行軍中、唯一の微瀾ありき。迴迺野を過ぎ、豊後富士を群巒の間に望み、大分川の支流を渡り、行くと半里、明河原に至り、由布川よ出づ。橋墜つるを以て、舟に由て渡る。對岸を奥田と云ふ。小憩して茶廬に入る。佛壇新靈牌を置くもの二つ。怪しきことを問ふ、少婦泣て曰く、陰曆九月五日の大

水や、未曾有の變事、一瀉千里、奔馬の如く來り、樹を抜き、家を倒し、妾が父と母とを奪ひ去る、妾見て救ふ能はず。知らず、今何の邊に魚餌となり玉ふやと。聞くもの爲に泣を飲む。仰き見れば、巨樹の枝頭、葉屑列をあして懸る。而して万頃の田、稻實盡とく地に埋もれ、濕を得て芽を發す、五月新たに秧を挿むが如し。嗚呼甚しい哉、天の斯民に殃するや。三百憂國の士、同胞の災を視て、悵然又撫然、十時大分よ着す。尋常中學生市端窪隈町に出て迎へ、一行を導て、尋常中學に至る。校門を入り、兩校生運動場に對列し、先づ該校長金子銓太郎氏、出で、慰勞の挨拶あり。我中川校長之よ答へ、次に兩校喇叭手、同時に吹を起し、禮をなす。終て我校生徒一同、導かれて別運動場に入り、茶菓の饗を受く。中學生徒其間に周旋し、厚遇甚だ至る。休憩時餘にして辭せ出づ。中學生門前に整列して、之を送る。校門を出で折れて進む數丁、善行寺に至り、故本校生春山象雄君を吊ふ。君の我校に在るや、匪勉學大

に進み、人皆望を屬せしに、一朝二豎の犯す所となり、明治廿四年八月十三日を以て、不歸の人とされり。豈悲しうらまや。捧銃の式をみえ、喇叭手吊悼の曲を吹く。音節悽悲、人をして慘然たらしむ。終て隈本繁吉祭文を讀む。時に象雄君の家嚴、母君を伴ひ、來て傍らに在り。飲立仰き見る能はず。寺を去り廣衢に出で、隊を解て各隊逆旅に就く。

大分は大分灣頭にあり。人口壹萬三千、滿次増加の傾あり。市街清潔、商業繁盛、豊後第一の都會あり。東、海に臨み、齒善港町を距る遠からず。此地舊と府内と稱す。建久以還、大友氏封を此に受け、館を營て居る。建武以後、干戈頻りに動くを以て、更ら城郭を營みて、之れに據る。文錄二年、大友義統國除られ、全三年、豊臣關白城地を、早川主馬首長敏に賜ふ。慶長六年、朝議竹中重隆を此地に封せえも、其子重興に至て國除られ、十一年、日根野吉明大坂の功を以て、此地に治す、子あくして國除かれ、萬治元年、松平(オキナ)大給氏(オキナ)左近

將監封に此地に就きしより、後世之を襲ぎ、維新の時に及べり。城趾は町の東端あり。今大分縣廳及び測候所の在る所。

金剛寶戒寺は町の南端上野にあり。聖武帝神龜四年、僧行基勅を奉じて立つる所。千二百年來の古刹あり。毘首竭摩造る所の、佛像一軀を安置す。三條帝の長和中、佛工定朝をえて、毘盧遮那佛像を造らしめ、大に佛殿を興し、大納言藤原行成をえて、金剛寶戒寺の五字を書せしめて、之を賜ひたりとあり。其後鳥羽帝の永久四年、大に山閣を興して、僧房六十余區を設け、儼然たる大伽藍とされり。後世屢荒廢に歸せんとせしを、大友氏日根野氏屢之を興し、今日に及べり。

此日中學校師範校の職員、其他重もに教育に關する者、我職員一同を請して、饗宴を張る。其他物を贈りて慰勞するもの甚だ多く、師範校煎餅を贈り、教育會鵜卵を贈り、有志家折詰を贈る。其他一々記せず。一行殆んど茶菓佳肴に饜く。

昨日來經る所の地、皆水災の餘、慘狀見るに忍びざるものあり。前程の狀を問ふに、更に之より甚しきものありといふ。乃ち此夜金を醸して、義捐せんとの議、期せずして職員生徒の間に起る。議立らに成る。乃ち職員二十圓生徒六圓五十錢、義捐の旨を、中學校長金子氏に告げて去る。
夜雨る。

十一日

雨霽る。六時半大分を發す。數街を経て、蓬萊山に出づ。蓬萊山は市外北數百歩にあり。春日祠を祀る所にして、今公園地たり。(豐日志に曰く「清和天皇貞觀二年三月、豐後國司藤原朝臣世數、請_レ移_二祭南都宗祠於國府。詔許_レ之。遂立_レ祠。建久中。大友能直爲_二地頭職。就_二于府。修_二補其廢。略_二十二年。慶長竹中重隆。朝_二于東都。歸路播海俄然遇_二颶風。驚波騰興。暝雲四合。不知_レ所_レ嚮。肅然禱_レ神。頃刻風止。波穩布帆無_レ恙。遂歸_レ府。乃命新作_二神祠。以奉賽。」云々春日祠即是也。園一隅老松蒼鬱、其間より大分灣を見

る。雲烟の開闔と、白帆の往來と、一望の裡にあり。一方廣潤、假山を築き、上に賢女碑を建つ。尋常中學生、師範校職員、送てこゝに至る。各中隊長第一第二小隊を園内に整列せしめ、一齊射撃をす六回、以て大分の繁盛を祝して去る。群り睹る者、爲めに耳を掩ふ。行く數丁、齒普港に出づ。(此邊の海を齒普海と云ひ、一に神宮寺浦と云ふ。豐後國志に據るよ、昔春日祠の傍ら、神宮寺ありて、神務を掌る。故に名づく)。南浦集に曰く「天文十年辛丑秋七月波羅伽兒國驀。有一大海船一隻、直到豐之神宮浦」と即ち此地あり。又全十二年八月、其人六大船に駕して來り、此後比年絶へず。野史に曰く「大友義鑑喜_二其貨賄。許_二互市。且兼受_二天主教法。」と却ち是時のとあり。茅元儀が武備志に「西蕃波羅多伽兒國佛來釋古者傳_二鳥銃於日本豊州。」とあるも此地あり。此地の我國近古の外交史に關係あるかくの如し。明治の初年新たに港を築き成せしも、佳良あらざるを以て、船舶の出入甚だ多からず(齒普よ

方小路を岐出す。これ豊後の第一宮、^{イヌ}杵原神社に通ずるもの。

杵原八幡祠、舊由原に作る。齒舌より半里、由原山中にあり。應神天皇并びに神武天皇を祭り、縣社に屬す。老樹繁鬱の間、礎を拾ふ數百級にして樓門あり。敵國降伏の四字を扁す。而して門扉椽

椽、遍く彫るに、唐土二十四孝、其他古今名士の事蹟を以てす。彫刻甚だ巧緻ならざるも、以て俗眼を明らさずるに足る。日暮し御門の稱ある、所以なり。門を過ぎて入り、再び礎を拾ふ數十、廻廊

に達す。刻椽丹楹、莊麗を極め、古樟巨松、これを周ぐりて擯立し、森嚴自ら敬を起さしむ。祠記を案するに曰く、^{イヌ}杵和天皇、天長四

年十月、延曆寺僧金龜和尚、詣于豐前國宇佐祠、誦經勤行、有神託之感、乃來此郡寶來郷、偶望見古樟樹、則有神教之驗、於是建祠、

國司大江朝臣宇久以奏之、因得預官社、承和嘉祥之後、猶有勅使奉幣。云云勸請實に一千年以前にあり。建久以後大友氏世之を

修し、祭田を寄す。神領二百四十六町と云ふ。其盛想ふ可き也。蘇物の今日に傳るもの甚だ多し。寶物古文書凡て七十品、劍類百七

十二本

これより路海に沼ひ、左由布鶴見の山脈を望み、右別府灣を控へ、水を隔て、遙に國東半嶋を見る。

長く海中に斗出し、黛眉螺髻の間、粉壁皓々たるは

別府日出の諸港あり。而して半嶋盡くる處、水光天と連り、烟波漂渺の間、一抹雲の如く横はるものは、四國の山也。万頃微波の裡、三々五々白鷗の如きものは帆影あり。翩々として落葉の如きものは漁舟あり。滿眼の風光、總へて畫致。

海に沼ふて行く里餘、四極山下に出づ。(一)に高崎山又柴津山と云ふ。高さ五百九十四米突(山高く海表に峙岬し、崎嶇隣岫、攀ち易からず。古來和歌の名所として、所詠少からず。

柴津山ならのしたげをりしきて

こよひはねなん都戀しも

柴津山風吹きすさふすならのほに

たえくのこるひくらしのこみ (二品親王守覺)

(後 成)

山上癡癩あり。大友氏の據る所あり。山下もと民居あり。沖濱又瓜生嶋といふ。慶長元年、地大に震ひ、山崩れ、海溢れ、北別府より東南佐井に至る五六里、海濱土壤湮滅して、人蕃漂没すと云ふ。(豊後國志)海中巨石あり。八疊石といふ。上數百人を坐せまむべし。俗に此石に龍宮あり。天旱する時、神樂を其

上に奏して、雨を禱るに必らず驗ありといふ。四極山麓を廻る一里、二岳屹として眼前に聳ゆるもの、即ち鶴見岳(海拔千五百八十九米突)及由布岳(千九百九十一米突)とす。此二岳は則ち阿蘇噴火脈中の高峰にして、地學上の第三紀に至るまで、海水淼漫、遠く瀬戸内海に連りたる、窪地帯に噴起きて、阿蘇山と共に、九州の中部を成形したるもの。其四近最も鑛泉に富む。塚原、別府、濱脇、觀海寺、鐵輪等、其最も著はれたるものあり。鶴見嶽、鍋山、明礬に硫質噴氣孔あり。有史期後殊に鬱氣充滿して、強烈の破烈ありしは、口碑に存ま、亦三代實錄等に散見せり。由布嶽は其頂雙峰に分れ、其間に舊噴火口の跡を認むべし。此火山及鶴見群山を構成する安山岩は、主に輝石を副合する角閃安山岩に属し、又之に少量の黒雲母を包含することあり。

(地質要報による)

鶴見山下國道に沿ふて、濱脇別府の二市相接在す。共に温泉を以て大に著はる。別府は人口五千、蓬蒿

海に面し、埠頭を築き、港内水深く波靜にして、船舶の出入甚だ頻繁。加之山水明媚、碧波青巒相映じ、高厦大樓岸頭に連る。温泉至る所に涌き、最も善く皮膚筋骨の痼疾を醫すといふ。其發見は遠く神代に在り。神武帝東征の時、軍艦早吸水門を過ぐ。時に珍彦といふ者、舟を出して帝を迎へ、此温泉に浴し玉はんことを勸む。帝遂に行幸えて入浴し玉ふに、玉體健やかなること、恰も草葉の露を吐が如し。因て此湯を吐露湯と名くと。其後屢變災あり、湯槽癘壞せしも、靈驗あるを以て、壞に隨て之を修め、今日に至れり。近ろ浴舎を營むものあり。宏壯清靈、今方さに其半を成せり。

別府を出で、行く數丁、海岸一帯の地を石垣原といふ。平原廣潤。亂石縱横、實相寺山其北に聳へ、鶴見山其南に峙ち、立石山其南にあり。こは是れ、慶長五年、黒田孝高大友義統と戰ふて、之を亡ぼしたる處。(事笠間教授の「大友氏ノ興衰」に詳也、復費せず)此戰や大友氏命脈の關する所、良將勇卒苦戰

奮闘し、遂に怨を飲て斃れたるもの無數。三百年後の今日に至るまで、天陰雨濕の夜、徃々鬼哭の啾々たるを聞き、燐火の熒々たるを見ると云ふ。壯士來て銃を杖つき、古を吊へば、悲風浙瀝、征衣を吹き、汀松欒々、怨を語るに似たり。

原を過ぎて一村落に入る、此を石垣村とす。田畑の間、竹樹鬱蒼たる處、穴居の遺跡を見る。窟戸濶七尺許、内部分れて數區をなす。其深さを詳にせず。蓋し日本紀景行紀に所謂『茲山有_二大石窟_一。曰_二鼠石窟_一。有_二蜘蛛_一。一曰_二赤_一。一曰_二青_一。』とは是あり。

龜川村を過ぐ。路傍小祠あり。祈り賽する者、皆假面を納る。累々祠に滿つ、亦一奇習也。古市豊岡の諸村を過ぎ、午後一時半日出に着く。洗足沐浴、日尙は高きを以て、隨意に市中を散歩す。

日出城、南は齒齶の海に臨み、石壁峭壁、西北二方は土地平坦、環らすに深壕を以てす。周圍石垣高く疊々、形勢險要怙むべし。始め細川忠興之を經營し、木下淨英資を投して牙城を築き、後木下

氏世之れに據り、明治維新の時に至る。今や城樓盡く撤し去り、其趾に就て陽谷小學校を置く。松屋寺は町の南方にあり。城主木下氏の塋域にして、寺前古鉄蕉二株あり。老幹蟠屈、數歩を覆ひ、高亦之れに稱ふ。世稀に見る所、攝の妙國寺のものに比するに、其右に出づといふ。寺に二匣の念珠を藏す。一匣毎に、羅漢像を彫る四乃至五、總て百八顆にして、五百をなす。又櫻挑の種子一個、二十七の猿群を彫るものあり。巧緻目を驚らす。共に文祿の役、朝鮮に獲る所。寺南丘腹に文簡帆足先生の墓あり。酌者踵を接して至り、香花常に絶たず。蓋し先生學深く、徳高く、遠近の民之を視ること神の如く、今日に至るまで、先生を慕ふ宛ら其生に於けるが如し。來り詣づるもの、皆其標石を割いて持ち去る。以爲らく、之を藏するときは、先生の冥助能く災厄を脱し、禍難を免れしむと。嗚呼無學の徒、先生を慕ふ猶かく如し。況んや道學を以て、世に立たんと欲

するものをや。先生の學は經を本とし、旁ら釋老
よ及び、且つ闡書を読み、窮理通十餘萬言を著
し、以て物理を明らにし、且つ病理を究む。嗚呼
儒と云ひ、儒といふ、訓詁詞章をしも事とせん
や。先生の如き、始めて眞儒と謂ふ可きのみ。

黄昏出で、陽谷城趾に散策すれば、蛾眉一痕、氷
の如く由布山頭に懸り、清光落ちて瀟湘海に碎け、
金波皎々天際に流る。

此日日出有志者、餅數千顆を贈る。

十二日

晴、六時半發す、新道により行く三里、山香村を過
ぐ。此邊一に金山と稱し、往時多く金鑛を採りし
處、掘鑿の跡多く存す。然れども、今や其業大に衰
るへ、倉成に於て、僅かに餘喘を保つに過ぎず。
行くこと一里、十一時立石に至り、喫す、休憩半時
にして發去、行く二里、白波橋を渡り、宇佐本宮の
跡、大尾山を望み、豊前に入り、行く一里、岩崎に至
り、本道より分れて小徑を取り、進むこと數丁、蟻

木村に至り、故本校生蟻木完吾君の墓に詣る。完吾
君、資性善良、學才に富み、殊に數學に長き、其吾我
に在るや、精勵苦學、出藍の聞ゆりしが、天斯人に
年を假さず、一朝不歸の人とあれり。實に昨年四月
あり。哀哉。捧銃吹奏を終り、渡邊斷雄祭文を讀む。
時に夕陽將さに沈まんとし、悲風四來、林樹撼き、
木葉散り、恰かも盛者必衰を示すに似たり。蟻木氏
の親戚某々等、茶菓を以て一行を饗す。墓を去り導
夫に従ひ、道を膝畦に取りて進む。路狹く伍をさす
べからず。即ち一列にして進む。全軍數町よ涉り、
透迤長蛇の如く、一奇觀を呈す。行く數町、宇佐に
着く。時に午下五點鐘。(此日歩む所九里)
町よ入るや、先づ隊伍を調べ、龜山の宇佐八幡宮に
詣づ。喇叭嚙々、華表を過ぎ、馬場を行く數丁、能舞
臺の前より路左折し、少しく上る。一面蒼石を敷
く。路の左右、老樹穆々、森嚴自ら神靈を鎮むるに
足る。上る數百歩、西大門を入りて右進し、閨門の
前に出で、整列し、劔を箆して銃を捧げ、喇叭手君

が代の曲を吹奏し、隊外の者肅然敬拜す。閉門壯偉
 天を摩し、丹楹梁楹、間々飾るよ黄金を以てす。左
 右廻廊之を繞らし、其内申殿より神殿に連らある。
 規模宏大、其建造の初めは、實に遠く天平勝寶年間
 にあり。爾來數十年毎に、改築して今日に至る。一
 行拜乞終り、西中門より入り、廻廊の前に至れば、
 社内の寶物を出して、一行の至るを俟てり。乃ち皆
 前庭に坐し之を覽る。宇佐町の碩學、佐藤千英氏、
 出で先づ當社の縁起を略説し、次て一々寶物よ
 就て、其來由を説く。

官幣大社宇佐神宮は、鎮西第一の大社、本殿三に
 の分れ、一ノ御殿は應神天皇を齋き奉る處。欽明天
 皇三十二年、此龜山の麓に顯現あり。これ實に日
 本國中於て、應神天皇八幡と現はれ玉ひし初め
 あり。二ノ御殿は比賣太神を祭る。此神、神代に
 豐葦原の宇佐嶋に天降り給ふ。即ち今の大元山
 (龜山より南里餘)にして、聖武帝御宇、天平元年
 神託ありて今の宮處に鎮まり玉へり。三ノ御殿

は神功皇后を齋き奉る處なり。此外未社境内に
 あるもの凡て十四社、攝社全六社あり。

藏物に至つては、盡とくこれ無二の珍寶。一として
 目を驚かさざるものも乏。今其二三を擧ぐ(分註は
 祠記よ據る)

神息之刀(此神劍雖當宮寶物、既失没而沒海中、不圖嬰瀛夫
 之網、元和三年於石州銀山眞平得焉、以重奉神納)
 畢云々

境内十景之歌二卷(安永六年、酉年正月二十一日、烏丸大
 納言藤原朝臣光胤、同侍從光祖、及日
 野右中辨藤原實枝等奉納)

不動之畫像(智證大師
 筆ト云傳)

高麗王之太刀(文錄四乙未年十二月十三日
 黒田甲斐守孝高奉納)

金泥經文(弘法大師
 筆)

此他宇佐八幡縁起、御詫宣集十六卷、全足利義教解
 題、驛路の鈴、源豫州の帯びたる太刀の帶取、墓目
 の鐮矢、紫石硯、春日作類當、繪入御縁起等を見る。
 何れも史學の研究に資するもの。

(玉纏御太刀(タマヰキ)長さ五尺許、室柄共に金銀を以て之
 を被ひ、纏ふに青紅の玉を以てす、玉纏の稱ある所
 以)金銀の延板、(方一尺許、厚さ二分許、大和錦を

以て之を包じ御裝束、御袍一、御下襲一、御單一、御袴一、御表袴一、御赤大口一、天子の御平服と云ふあり。これ甲子の年毎に、朝廷より奉幣使立つ時、必らず奉納せらるゝ所にして、往古より其製故實に據るが故に、紋章彩色等、今日のものをして上古のものに比するに、毫も異なることなしといふ。金銀の延板は、中古よするまで、勅使これを持ち來り、參籠の時、之を剪りて、幣串に挿し、奉納するの例ありしが、近古以來、延板の儘保存すといふ。

宇佐神祠と共に、萬世動かざるものは、和氣清麿の美名なり。清麿が參籠して、詫宣を受けたりと時は、今の龜山にあらずして、大元山に鎮坐ありしと云ふ。(宇佐の東半里和氣村あり。清麿の上陸したる所、今碑を立てて之を標す)

藏物を覽終つて、再び來路を取りて、町に出て隊を解て分宿す。

町の中央鐵華表あり。寛保三年、江府人橋本平左衛門奉建する所、之を過ぐれば小河あり。寄藻川

といふ。橋ありて架す。吳橋といふ。此も過ぐれば直ち樓門あり。吳橋と樓門と、共に元和中細川

侯の奉建に係る。市傍深林中、仲哀帝の廟あり。始め櫻井教授、疾を以て行に従ふ能はず。後癒ゆるを以て、此日小倉より來て、一行に會す。賀來教授

亦軍に従はず。郷里宇佐に歸りしが、此日出で、一行の來るを待ち、之に會す。教授の親戚某氏、此夜

職員を請して宴を張り、慰勞す。而して教授は饅頭數千顆を生徒に頒つ。尋常小學校長永田寬吾、亦菓

子若干を贈る。明日を以て再び假設的演習を、千源寺原に行はんとし、今夜沼田統監より左の命令あり。

第二回演習

(前方略續行)

南軍右側支隊命令 (十一月十一日午后九時宇佐町ニ於テ)

一、敵ハ國道ヲ大分ニ向テ前進ス我軍ハ途ニ之ヲ迎撃セントス

本支隊ハ中津街道ヲ前進シ本軍ノ右側ヲ掩護セントス

二、第一中隊ハ前衛トナリ明十二日午前第六時
三十分宇佐町ヲ發シ驛館村四日市山下村ヲ
經テ前進スベシ

三、第二第三第四中隊及第二大隊ハ本隊トナリ

前衛ノ後方五百米突ニ在テ行進スベシ

四、余ハ本支隊ノ先頭ニアリ

右側支隊長 何某

十三日

曇、六時半發す。行くこと半里、驛館川に出づ。舟に
由て渡る。對岸法鏡寺村に小憩え、路を迂けて、故
本校生池田宇作君の墓下に出で、之を吊す。捧銃吹
奏、例の如く終り、村川堅固祭文を讀む。宇作君は、
我校の先輩、學を好みて倦むを知らず、撰はれて特
科生とありしが、幾もかく病を獲、遂に大器を抱て
逝けり。哀哉。此邊水害最も甚だしく、慘狀見るに
忍びず。大厦高樓一も痕を止めず。園池田圃盡く沙
礫の地と化し、今や小牌を立て、僅かに舊主を知
らしむるのみ。塚墓崩發し、白骨沙上に暴露して、

人収むるをなし。獨り宇作君の家と墓と、僅かに流矢
を免かれ、沙礫の間に孤立せり、滿目蕭條、四顧慘
憺、我黨の壯士素と豪氣天を衝く。是に至て腸斷九
んと欲す。

八時法鏡寺村を發す。數町にして酒井神社あり。古
木森々中に大楠樹社前に蟠り、數百年來の古色を
呈す。社殿大ならずと雖、結構至れり。社の左側に
池あり。方二間餘、清水掬すべし。池中別に石を以
て一井を劃す。是を沸泉とあす。傳へ云ふ、上古美
酒涌出せしも、中ごろ利慾の爲めに酌むものある
に至り、頓に涌出止みたりとぞ。現今の清泉是其痕
跡を存するものか。此社或は和泉宮と稱す。

行くこと半里、四日市に入る。高厦巍然雲を衝くも
のは東西本願寺別院あり。休憩二十分千源寺原既
に近きよあるを以て戰鬥に要する諸般の準備をな
し安東支隊長は左の命令を傳ふ

南軍右側支隊命令

(十一月十二日午前
十時四日市ニ於テ)

一、敵ハ千源寺原高地ヲ占領セリ予ハ之ヲ攻撃

セントス

二、第二中隊ハ本道右側ヨリ敵ノ左側ニ向テ攻撃スベシ

三、第三第四中隊ハ本道左方ノ高地ヨリ敵ノ右側背ヲ攻撃スベシ

四、第二天隊ハ千源寺原後方ノ低地ニアリテ豫備隊タルベシ

五、小行李ハ豫備隊ノ位置ニ在ルベシ

六、予ハ本道左側ノ高地ニアリ

此池や、中津に通ずる本道、直く箭の如く貫き、左より岡巒あり。右方に陵夷し、三面皆茫々たる草野たり。敵其高所を保ち撤開せるもの、遙ろに松間に隠見す、我前衛中隊敵と六百米突を距て、道を横つて陣す。第三第四中隊は左に進て林間に撒し、第二中隊は左に開く。注意周到乗すべきの餘地なし。九時三十分砲聲起る。是敵の我右側に當るものあり。戰是より始まる。此時傍觀者集るもの雲の如し。

南軍先つ兵を進めて、急に敵の右側を衝く。北軍乃



ち之に應じ、専ら右側を護考、下瞰して亂射する、甚だ急なり。銃聲山野を撼かし、兒童觀る者、驚き走る。南軍少しも屈せず、茂林を分つて進む。既にして北軍勢盛まり、其左側の護を撤して、専ら右側を防禦す。此時南軍は既に右翼を張つて、遠く敵の左翼を圍み、以て其背を斷す。北軍是に於て稍退く、南軍乃ち其虛に乗じ、號令一發、豫備隊と前衛本隊を合し、吶喊して敵の左翼を衝く。北軍大に亂れて、退却せむとす。時に喇叭一聲、終局を報ず。兩軍各兵を収めて、本道に出つ。沼田統監は中小隊長を集めて、講評をなし、終て小憩す。

北軍の命令は左の如し。

北軍左側支隊命令 (十一月十三日午前八時廿分 四日市字千源寺原ニ於テ)

一、本支隊ハ追撃スル處ノ敵軍ヲ中津附近ニ於

テ防禦ノ命ヲ受ケ

余ハ四日市町字千源寺原ノ高地ヲ占領シテ

敵ヲ防禦セントス

二、第一中隊ハ舊道ト國道ノ交叉點ヨリ右方ノ

高地ヲ守備スベシ

内一分隊ヲ本道ノ邊リナル一軒屋ノ處ニ派

遣シ停止斥候タラシムベシ

三、第二中隊ノ二小隊ハ第一線ノ後ナル小徑ニ

在リテ援隊タルベシ

一小隊ハ本道ノ交叉點ニ於テ援隊タルベシ

四、第三第四中隊及第二大隊ハ本道ノ交叉點後

方百五十米突ノ處ナル低地ニアリテ豫備隊

タルベシ

五、小行李ハ豫備隊ノ位置ニアルベシ

六、予ハ本道ノ援隊ノ處ニアリ

北軍左側支隊長某

演習を終り、千源寺原を出れば、茶店小餅を嚙くほ

り。久々軀餅と云ふ。古へ和氣清磨、命を奉じ宇佐

に詣するの際、老婆献せしものと云ふ。行くこと一

丁、川あり堤防破壊、沙礫田面を埋め、慘狀言語に

絶す。十一時池畔に於て晝食す。犬丸川を渡り、如

水村を過れば路傍の林間に池あり。水を湛へず、長

方形をなす。長凡五六十間幅十間餘、黒田氏大友氏と戦ふに當り、兵士を此中に入れ、以て人數を計りしと云ふ。故に計人池の稱あり。蓋し村名亦是より出る。是より山林の間を穿ち、鏑矢堂に出づ。昔日藩府死刑場たるの時、樹木鬱葱、鬼靈行人に向て、怨むが如く訴ふるが如く、風物自ら蕭々たりともの、今や全く田畑と變し、舊觀あるをなす。行くこと數百間、川あり流矢川と云ふ。楠公流矢を發せし處と云ふ。其矢止まる處即ち今の鏑矢堂是なり。是より中津を距る凡を半里餘、中津尋常中學生徒出で迎ふ。一時中津町に入る。

中津は北豐第一の都會にして、小倉を距る十二里餘、下毛郡の西北隅に位す。人口二万五千、戸數二千、市街繁盛なり。天正年間、黒田孝高初めて此に城く、後封を易ふるもの數氏、最後に至て奥平氏此に世襲す。舊城は今公園なり。園中櫻樹を植え、神祠あり。此地西は山國川に臨み、北は海に濱す。風景絶佳。

十四日。天下何の處か山あからん、地上何の邊か水あからん、山や水や至る處に有りと雖、獨「耶馬溪山天下無」と稱す。蓋し山容水態の凡あらざるものありて然るか。昨夜旅裝一束枕頭に整へ、夢魂先つ馬溪に馳せ、唯明朝の好天氣を祈りしが、晨たに鹽嗽を終り天を仰げば、替たる彼小星中空に羅列し、一抹の黒雲だも横はるをなし。此日体の輕さを覺ゆるは銃劍を携へざるが爲なり。氣の裕あるを知るは隊列を用ゐざるが故なり。戎服俗に似たりと雖、思想遙に雅に逸し、山國川に沿ひ鶴居を過ぐ。是より西、川を渡り唐原村あり。梅樹甚だ多く、茅屋其間に隱見し、冬季に至ては雲影花光相含み、風韻多しと云ふ。

眞坂村より村家漸く高く、溪水愈々低く。遙に岸を隔て、側立せる高巖、幽窟を頂て神を藏すと云ふ。原井妙見是あり。江山既に異想あるを覺ふ。東城井村字屋形に至れば、山勢自ら一大屏障をなす。巖然たる巖巔上縁をなす、碧乎たる水色下縁たり。中に

藏するもの亦自然の画幅をなせり。巖は老松を倒さんと試みるものゝ如く、薛蘿其間に墜累して和を計るに似たり。茅屋高樓は斷崖に據て巖に應援し、山服の洞門は路を開て松の潜伏に容易ならしむ。之を佛坂岩樓の勝景となす。

行くこと數町。小橋を渡れば則岩窟山服に開くあり。巖片悉く縦折し、宛然たる屏風あり。窟中小庵あり、有野弘法是あり。屏面全く蒼老古色人に迫る。昔弘法筆を投えて書す、筆痕猶彷彿と去て存すと云。

樋田洞門は曾木樋田の間にあり。一大老仙深淵に臨み、肩を怒らして背坐し、睡眠熟して將さに墜ちんとするの腰部に當て、洞口開く、老仙の陰、又群仙の駢肩するが如く、隱然隆起、其深遠掬すべし。洞中に入り、行々蝙蝠の夢を破り、呼號反響子を驚かし、十歩に一窟を數へ、數百間すれども猶は盡さず。洞門は江戸淺草の行脚僧禪海の開鑿する所。古へ路斷崖に由て通し人馬の此間を過るもの、誤

て溝壑に轉するもの其數を知らず。禪海先づ腕を奮て開鑿に従事し、衆の助けを得て竣功せまると云。眞に五明を修して人畜を濟ふの僧と謂ふべし。其勞想ふべきあり。洞門の中央石像を安置するもの、即ち禪海の像あり。洞口より津を渡り、對岸より之を望むときは、尺馬寸人絶洞の間に出没するを見る。上は則奇巖攢竦、夏雲の狀をなすものあり。春の矗立せるが如きあり。虎豹相闘ふか如きあり。龍の雲に嘯く如きあり。樹は石間より生ず。或は石と勢を争ひ、或は巖と相闘ひ、巖面を汚さんと試みる者、却て蹶伏せらるゝ者、逃んとする者、薛蘿の爲に捕へらるゝ者、草は多くは松蘭にして巖頭に秀出せり。仰けば更よ高峰駢列空を摩玄、天人音樂を奏して至るか如し。水は石根を洗ひ、忽にして激湍、忽よして澄潭、山影倒に映じ、水聲琴を彈す。蓋し此景や耶鳥の百勝一以て之を蔽ふもの、筆紙よ盡すべきにあらず。

松杉鬱葱俗塵を遠ざけ、人世を眼下に脱却し、無漏

屈あり五百羅漢、牟尼佛を圍繞す。眞の嶮巖屈かと思はる。舍利屈に入れば却て捺落の厭ふべきあり。羅漢寺是あり。殿宇廊廡人工の嫌ありと雖、危巖雲を衝て殿宇を浮ふるが如く、障壁崛起幽竈を護するが如し。寺門高き處より前方を眺れば、奇嶮巖然として田畝の間に躍出え、岩色蒼老、千松鬣を振ひ、岩腹破れて天橋を架するが如きものは古羅漢あり。彦山の脊蜿蜒東に走ること二三十里、此に至て山尾一棹せるものたり。

羅漢寺舍利窟前に於て、生徒を集め、矢津助教授、地理上の演説をさせり。

元來我日本は山水明媚にして、洋人は特に天然の画國なりと稱せり。就中耶馬溪は頼翁の誇稱以來、何人も日本第一の名勝と稱する處たり。恐くは「ライン」河畔の「サキソニー」よりも、却て勝れたるや知るべからず。何か故に斯く奇形を生したる、他なし、火山岩の噴出多きを以てあり。凡そ風景宜しき處は、多くは火山岩にして、

花崗岩之に次ぐ。耶馬溪の如きは、其風景宜き極端に當れり。洋人が世界第一の美景と稱する、彼瀬戸内海の如きも、是地藩帯にして、阿蘇火山帯の通過せるか故なり。然れども噴火作用の非常に激烈ありし處は、却て殺風景を免れず、何とあれば、かゝる處にては其始め噴出えたる岩塊は奇絶怪絶あるべきも、噴出の連續作用は、灰を積み礫を散らして、其奇を湮滅せしむればなり。諸子が先日經過したる波野原の如き即是あり。若し其外面を覆被せる集塊物を取り去るを得ば、其下には此海内第一の耶馬溪よりも、幾層奇にして、幾層怪ある崑石の兀々たるを見ん。惜むべし、火山の燒屑は其奇崑を埋没し、剩へ土地、疎鬆樹木の宿根を許さず。之に反して、耶馬溪が斯の如く奇岩怪石を連ねて、往々畫家をして形管を擲たしむるものは他なし。此地阿蘇の大火山を距る二十里の外にありて、正さに火山作用の及ぶ最遠の地に當り、一たび猛烈の作用に逢ひ

て、噴起したる不規則なる崑石は、其後度々の小破裂に際しては、燒灰の達すべき距離以外に屹立し、今日に至るまで、依然として原形を存するあり。而して其頂上は稍水蝕の作用を受け、霉爛せる土壤に松樹を疎生するに至りて、其奇あるものは益々奇とあるに至れり。而して更に此耶馬溪に風致を添へたるものは、實に山國川あり。夫れ火山灰の集塊物は、其質概ね堅緻ならず。最も水蝕の作用を受け易きか故に、嘗て下きを求めて、此溪中に来りし山國川は、年々此欽岩を刻したることは、我々が今日經來りし路傍の巖腹數丈の高さに、水蝕の痕あるを知て見るべき。諸君よ帝國第一の奇觀たる耶馬溪はかくの如くして生ぜり。文人騷客はこれを以て神工ともたゞへよ。鬼斧とも賞せよ。地學者の眼には、適凄まじき噴出の燒尿、所々黴苔を附くるを見るのみ。

三日月池は賢女岳の麓にあり。梅樹脩竹の間を穿

てば、新月形一面の碧鏡頓に開け、樹間遠く冠石山を望む。中央碧巖突出、上に神を祀す。幽雅掬すべし。天長年間節婦(コトシヒメ)子刀自比賣(勝宮守の妻)住せし所あり。往時藩主頗る此池を重んぜしと云。

柿坂の勝景に至ては、頼翁も筆を擲て曰く。『嗚呼造物奇怪、畫手亦有寫不到者矣』と竹園翁詩あり。

『奇石幽巖綠樹閑。遊觀不負獲圖還。大痴斲法能臻否。也見白雲飛作山。』

暮色蒼然として至り、夕陽斜に岫雲を射る。未だ耶馬溪の半をも觀終らずとて、此山水と別るゝを欲せずと雖、歸路三里を餘すを以て怨を殘して途に上る。歸れば則奥平舊藩侯より、仲津町の有志者より、友枝生家殿より、我中川校長より、各茶菓或佳肴の寄贈あり。美味勝々て食ふべからず。

十五日。晴。六時半出發す。中津尋常中學校教職員及有志者、我行を送て山國川の渡頭に至る。川は水淺く沙石磊々、幅頗る廣し。分れて二派とあり海に注ぐ。橋を跨し。舟よ由て渡る。岸に達すれば是より

福岡縣管轄地に屬す。上毛郡あり。求菩提山大岳南方に聳へ、北は宇嶋八屋の諸灣出入之、白帆波間に浮び、防州の山嶺遙に森々の間に横ふ。

椎田町は豊津を距る三里許。海濱白沙青松の間に綱敷天神あり。管公左遷の時上陸の地ありと云。町に入れば已に豊津中學生徒遙に來りて、一行を此地に迎ふ。驛を出る數町、又豊津高等小學生の迎ふるよ會す。豊中生郷導ふり。軍歌交々起り、歩々活潑、前後七百餘名、新田原頭勇武維れ揚るとき、英彦山は遙に雲を排して我行を壯とするもの如く。稗川を渡り、重陽湖畔を廻り、將に豊津に入らんとす。轟然聲あり、烟花空に散ず。氣勢頓に張る。是より數歩を行く毎に烟花頻りに聲をあす。街口一大綠門を設け、戸毎に國旗を懸へす。町の中央又大綠門のあるあり。一行殆んど凱旋門に入る感をあす。綠門皆錦町有志者の我行を歡迎するも、の款待謝するに辭をなし。三時豊津尋常中學に入る。操練場に於て、雙方喇叭を以て挨拶す。次に兩校長の挨拶、次に兩校生徒總代の挨拶終り、食堂に於て、同校生徒より茶菓の饗あり。尋て校を辭し、町の中央なる中學出張所に於て、故高橋愼太郎君の靈を吊ふ。豊中生も亦來り會す。高橋君と學窓を同ふし、螢雪霽氣を生ずる時、水前寺の月、花岡山の花、君と共に携之しもの、今や或は大學に、或は此列中より。嗚呼誰か『花唯今日色。日獨舊時情』の感あらんや。水月哲英祭文を朗讀す。豊中生去り、我行亦隊を解て旅舎に就く。中學校教職員牛一頭を屠て饗す。又豊津有志者より、京仲二郡教育會より、高等小學より、各茶菓の寄贈を受く。此夜、豊中生兩三名總代として各舎を訪ひ、勞を慰して去る。此夜又十數發の烟花を揚く。

幕府長州を征するや、九州の諸侯皆小倉に屯す。小笠原氏總督たり。諸藩士退くに當り、小倉藩主も亦田川郡香春に退き、金邊峠の險を扼し、大に長軍を壓す。亂定り小笠原氏其鎮を國の中央に遷す。是即豊津なり。藩主居館の地は今其祖先源義光を祠れり。

豊津尋常中學校は藩立育徳館の後を繼きたるものなり。

十六日。六時豊津を發す。時に細雨霏々として至

り、満天墨を抹す。發するは臨み又數發の烟花あり。蓋し送意を表するあり。豊中生一同、送て天生田橋に至り、鯨波三聲、五中方歳を唱て別る。相遇ふ僅に一日に過ぎずと雖も、亦多少の情をしとせんや。是より降雨益々頻りに、布襪泥に塗る。久保村に至て天漸く晴る。新町を経て仲哀谷に向ふ、坂路險峻、衆争て登る。谷中全く樹木の眼を遮るなく。路左曲右折、前人後者斜面に繼續し、殆んど蟻列の觀あり。頂は達し顧望すれば、白路迂餘、龍蛇の蟠まるが如く。新町は脚下尺餘の處にあり。蒼茫たる三十六洋、遙に天と一髮。

仲哀谷は往昔仲哀天皇、土蜘蛛征討の時、鳳輦を駐め給ひし所なり。近ごろ壓道を穿つ。長凡五百間。

総て花崗石より成る。頗る大工作と云ふべし。忽ちにして暗黒の間を出れば、嶄然たる香春の諸山、全く細雨を経て濕ひ、崎嶇たる溪間の楓林、紅動て秋風寒し。

香春町は香春山麓を圍繞して市街をなす。田川郡

役所のある處より。山は平地に孤立し、絶壁千尋、總て始原岩の露出せるものたり。往時此山上に城砦ありしと云ふ。弓削田村を過く。田川採炭會社此に在り。此地方採炭の業盛なり。弓削田鯨田(嘉摩郡)共に其最たるものあり。此に休憩を取ること二十分にして發す。是より道路平坦直きこと箭の如し。猪位金村に至て。大隈に至るの里程を問ふ。土人答て曰く。二里。行くと半里にして又問ふ。野人答ふるに三里を以てす。半里を行て半里を遠くするは何ぞや。衆大に笑ふ。日本武尊を路傍の祠に揖し、豊前筑前の分境標を坂谷峠下に見て、嘉摩郡に入る。

日本紀を案するに。安閑天皇二年五月。筑紫福波屯倉、鎌屯倉を置くさあるもの、即今の嘉摩郡なり。

カグメ石嶺を下り、三時大隈町に着す。一泊。大隈町は山間の一驛にきて戸數僅々に三百、商況不振の趣あり。町の東方ある字下益は北斗社あり。社内の楠樹頗る大、周圍殆んど十三尋、下方竅をなす。

八疊を敷くべしと云。此夜、霜氣凜々、客夢成らず。初め笠間教授病を以て行を與にするを得ざりしが此日來り會す。

十七日。未明大隈町を發す。東天漸く明にして。古所山頭積雪愈々皓乎たり。千手町に小憩す。寺あり。千手觀音を安す。故に此名ありと云。降雨頻りよ至り。道路漸く險からんとす。字大力に至れば。

秋月町の有志者出迎て此に在り。是より道忽ち峻にして長し。是實に八丁越の稱ある所以あり。溪間大杉亭立。良材に富む。嶺に達すれば積雪堆をあす。大隈を出る頃ひ、仰て望みしもの、今現に蹈む所たり。左方の高き山を馬見山とあす。馬見山の東にある古所山とあす。八丁越は寛永七年より翌年と互り、黒田長興新に開通する所と云ふ。坂を下れば字野鳥にして、是より夜須郡に入る。十一時秋月町に入る。

日本紀を考ふるに。仲哀天皇九年春三月壬申朔辛卯。神功皇后層増岐野に至り、則兵を擧て、羽白熊鷹を撃て之を亡ぼし、左右

に謂て曰はく、熊鷹を取得て我心安しき。故に安き書する由出たり。後世に至り、夜須の二字に改めたるもの、如し。蓋し延喜以前にあり。

秋月は四面皆山にして、要害堅固の地たり。黃楊の良材に富む。地勢不便なりと雖、山高く水清く、頗る避暑に適す。商況振はずと雖、亦缺ぐべからざる要衝地たり。今や鐵道の通するが爲め、敢て秋月を過るものあしと雖、一朝海外と事あるの日に當り、長洲大牟田間の海濱に於て線路を遮らるゝあらば、西肥南筑より前後豊に至らんには、秋月を經ずして、將た何れの道を取るべきや。舊殿の岡上よ、垂裕明神社あり。藩祖長興を祭る。其岡下に招魂社あり。海賀、戸原等の諸勤王家を祭る。

秋月は昔大藏姓秋月氏の居邑。(原田氏も同姓)後漢の獻帝十五代の孫、阿多倍王販化し、播摩國明石の近傍なる大暗谷に來り住し、大暗氏を稱す。世々其地主たり、一日天皇明石に於て觀月の行幸を行はせらる。會ま大暗氏參候す、大暗の字明石適せず、宣しく秋月と稱すへしこの聖言を得、秋月氏を稱するに至れり。後筑前に來り住するや、地を秋月と命す。其居城は古所山上白

山神社より西一丁餘の下にあり。今猶城石を存す云ふ。秋月は其居館のある所なり。天正年間、種實に至り、夜須上坐下坐嘉摩穂波御井御原生葉企救田川京都の十一郡を領す、同十五年春豊臣秀吉筑紫を攻むるに際し、島津氏に與し、秀吉に敵す。雖遂に爲すへからざるを覺り降る。豊臣氏乃ち筑前全國を小早川隆景に與へ、秋月氏を日向財部に移す。後、慶長五年黒田長政筑前を領し、其叔父黒田圖書助を秋月の舊趾に居らしむ。長政遺命して、夜須嘉摩下坐三郡の内五万石の地を割き、勘解由長興（長政の弟二子にして後に甲斐守に任せらる）に與ふ。長興の初めて此に居る、實に寛永元年にあり。是より漸く市街をなすと云。

十一時秋月に入る。秋月分教場（高等小學）に於て、同町の有志者及地方入學生父兄より、茶菓の饗あり。因て晝食を喫す。分教場廣からずと雖、室内清潔、意外柑實點綴すと雖、一も之を採り去りし狀あり。以て校規整頓の一斑を知るに足る。有志者我操練を觀んよと望む。場内狹隘あるを以て、二中隊第一小隊、運動及銃の操法を行ふて去る。

秋月を出て、右一里八町餘、彌永村に於保奈半智神社あり。大己貴命を祠る。延喜式神名帳に出つ。日本紀を案するに、哀仲天皇九年秋九月、庚午朔己卯、神功皇后諸國に令して、船舶を集め、兵

甲を練せらる。時に軍卒集らす。是必ず神慮あらんとて、大三輪を建て、刀矛を牽り給ひしかば。軍衆自ら聚るさあるもの、即今の神社なり。（此記古處城趾後方の大岩に礮臺附着せる事實とを合せ考れば、往昔此地方は海濱かりしを知るに足る）

二時甘木町に達す。一泊。此地蠟及絞を出すを以て商業盛なり。戸數千三百平地に位す。交通便あり。旅舎よ就て後我校教職員より、茶菓を與へらる、十八日。午前五時出發す。曉光尙人顔を識別する能はず。唯路上霜、雪の如きを見るのみ。歸熊の期今日に在るを以て、意氣自ら揚り、歩々愈よ急あり。忽ちにして筑後御井郡に入る。本郷村に至る頃ひ、旭日東山より出づ。古歌に所謂「春は萌え秋は木枯るゝかおと山かすみも霧も烟とぞある」の寶滿山（一名龍山）は北方に聳へ、一帶の屏風山は南方に臥す。其間茫茫たる筑後平原たり。宮地村を經、村に將軍梅あり。其東に大刀洗川流ると云。前者は古征西將軍手から植うるもの、後者は劍を則ち菊地池光か「歸來笑洗刀」ひし處。筑後川舟橋を渡り、將に久留米に入らんとするとき。久留米尋常中學明善

校教職員生徒一同出て迎ふ。我行初め直ちに停車場に至らんことを期せしも、來迎を受しを以て、同校に寄ることゝあせり。通十町目の國道に於て、雙方喇叭を以て挨拶の辭をなし、直ちに導かれて久留米に入る。

久留米は筑後第一の都會たり。市街繁盛、有名なる緋及傘を出す處あり。十一時明善校に入る。講堂に於て、同校教職員より、生徒より、舊久留米藩出身の我校在學生より、各茶菓の饗を享く。其包に凱旋の二字あり。是我行の凱旋を祝するの意あり。次で篠山神社に謁せんと欲せしも、時間急に迫るを以て果さず。一時同校を辭す。同校生送りて停車場に至る。禮して別る。

一時廿分瀛車に上る瀛車故ありて發期を後れ、十五分を経て磷々の聲と與に發す。峰巒の翠微に高良神社を仰ぎ、田畑の紅葉は檜樹の多きを見る。羽犬塚矢部川を過る頃ひ。疲勞睡眠を促さんとす。忽ち一聲の瀛笛に驚かされ、車窓を推せば、山頭烟を

噴き、磷々の聲轟々。大牟田是あり。暫にして長洲に出づ。皆や有明海上波驚かず、温泉山頭雲靜かりと雖、風強く浪荒く、三百の同胞此波際に沈みたる客月の事を追思すれば、自ら慘憺の風あり。丁丑の戰場たる木葉植木を過き、池田に至れば、秋月先生以下教職員及在校生徒皆迎へて在り。手を舉げ帽を振り、我行の無事を祝せらる、殆んど万里遠征の後、慈親の膝下に見ゆるが如し。車を下り相見れば、赭顏蓬髮、恰も黒人の白人に於るが如し。四時意氣勇壯、伍列肅々として飯校し、一同本館の前庭に圓陣を造て整列す。乃ち中川學校長慰勞の告辭を啗之、茶菓を與へらる。次で沼田統監、旅中出發の期、隊列の法、毫も誤らざりしを賞せられ。更に二三の戒諭するところあり。終て櫻井教頭の語下に、一同五中万歳を大喊三聲して開散す。此夜校長より教職員及小隊長以下諸役員を招き、會飲以て勞を慰せられたり。

學と云ひ學と云ふ、讀書を之も云はんや。業と云ひ

業と云ふ、藝術をしも云はんや。風俗を觀、人情を察するも亦學あり。筋骨を鍊り、山海を跋涉するも亦業あり。此行や、坐ろに阿蘇五岳を望み、面り火山岩を蹈て、地理學を實地に修め、摧けたる家屋、壞たる堤防を見ては、猛雨百川を決し、暴風千山の崩したる豊後の慘狀を憐れみ、至る處有志者學生の優待に感謝し、行く處人情の如何を熟察す。耶馬溪は活筆を振はしめ、八丁越は逆境を示す。其他兩豊の深山は、以て樵夫の勞苦を知らしめ、長洲の海岸は、具さに漁人の辛酸を觀せしめたり。日を費すこと十有三日、道程一百餘里、其間師長淳々たり。子弟肅々たり。嗚呼常に白水以て膽を洗ひ、已に兩豊の秋陽に晒らす。皓々乎として加ふへからざるのこ。修學旅行の名空しからずと謂つべきなり。

(完)



印刷期迫りて文字の推敲

に暇なく剩さへ一篇の文

兩人の手に成りて雜駁見

るに堪へず愧ぢて又愧づ

る所なり